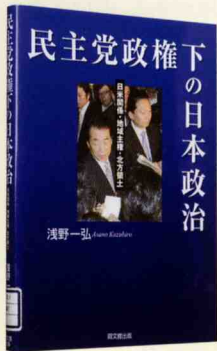


民主党政権下の日本政治：日米関係・地域主権・北方領土



浅野一弘 著
同文館出版
2011.4

2009年8月30日の第45回衆議院議員総選挙において、民主党は、308議席を獲得し、念願の「政権交代」をなした。これは、有権者の多くが、自民党の長期政権のもとで生じたさまざまな制度疲労を目のあたりにし、「チェンジ」を求めたからにはほかならない。また、民主党がウリにしていた、「国民との契約」=マニフェスト(政権公約)の実行に期待をよせた層も少なからずいたはずだ。

ところが、現実には、鳩山由紀夫首相と小沢一郎幹事長の政治とカネの問題、普天間飛行場移設をめぐる迷走など、有権者は、政権交代にかけた夢からあえなくさめてしまうこととなった。鳩山首相のあとをおそった菅直人政権のもとでも、民主党は、大きな成果をだせないままの状態であった。そのため、日本政治は混迷の度を深めてしまっている。政権交代に対する有権者の期待が大きかった分、

政治への不信感がかえって増幅するという大きな皮肉も生じてしまっている。

そこで、拙著では、日米関係、地域主権、北方領土の3つをキーワードに、民主党政権下の日本政治の分析をこころみた。そこからは、民主党のかかげたマニフェストに、一貫性がないという事実がみちびきだされた。今後の日本政治の動向を考えるうえで、こうした民主党のかかえる問題点を把握することは、きわめて重要であろう。拙著が、そのための一助となれば幸甚である。なお、本書では、東日本大震災以降、大きな注目をあつめている危機管理に関する記述がもられていないので、拙著『危機管理の行政学』(同文館出版、2010年)もあわせてご覧いただければ幸いである。

指定図書コーナー [317.1 || A87]

浅野一弘(法学部教授)

近世後期の奥蝦夷地史と日露関係



川上淳 著
北海道出版企画センター
2011.2

本書の奥蝦夷地とは道東部から千島列島南部をさし、この地域は18世紀後半から19世紀の初めにかけて激動の時代であった。千島列島へロシア人がラッコの毛皮を求めて南下し、蝦夷地にもロシア人が交易しようとして渡来した。日本側でも場所請負がクナシリ島に及び、1789年には場所請負の和人ら71人が、脅迫・虐待による慣れない雇い労働に耐えかねたアイヌの人々によって殺害されるクナシリ・メナシの戦いが起きた。幕府はロシア人がアイヌを指示しているのではないかと疑った。

さらに1792年には、ロシアの第1回遣日使節ラクスマンが漂流民大黒屋光太夫らを伴って、子モロ(根室)に来航した。目的は日本との通交通商関係樹立であった。

本書は、この二つの出来事を核として、その前後

の奥蝦夷地の具体的な姿と日露関係を実証的に考察した。そこで見えてきたのは、アイヌ社会が日本の幕藩制国家とロシアの毛皮税徴収の間において、千島列島を通じた交易ルートが、やがて幕府によって遮断されてしまったこと、アイヌが場所請負商人の対等な交易相手ではなく、幕藩制国家に被支配者として編入される過程であった。

これらの歴史過程は、当時辺境ともみなされていた「くにざかい」の地での出来事であったが、日本の近世国家の対外政策や政治的関心の中心課題であり、辺境の一地域の些細な出来事ではなかったことを本書で明らかにした。

第2開架閲覧室 [211 || Ka94]

川上淳(文化学部教授)